

コンピューターで俳句作り

コンピューターが俳句作りの手助けをする。京都大学術情報メディアセンターの土佐尚子教授(47)のグループが、編集工学研究所の松岡正剛所長(65)と共同で興味深い研究を続けている。その名も軽やかに「ヒツチ俳句」と呼ぶシステムの威力はいかに？ 研究室を訪ねてみた。

(待田晋哉)

現在開発中の新型「ヒツチ俳句」は、インターネット上に研究用サイトがあり、携帯電話でボタン操作する。空欄に好きな単語を2個入力し、指定された京都の歌枕10か所から一つを選ぶ。すると、単語を生かした句が、季節にふさわしい和風な配色の背景画面と一緒に表示される。

「道」「もみじ」の語と「渡月橋」を選択してみた。

△凍道や路傍に咲きて捨小舟

完成した句から次の句を連想させ、連句も作れる。どんな作品が出来るのかわくわくするのは、人間同士の句会で仲間の俳句を待つときと同じ気分だ。

基本的な仕組みは、次の通りだ。例えば、「木霊」と「雪」



和風の背景画面とともに、俳句が表示される

の単語を入れる。コンピューターは、切れ字の「かな」や助詞の「さえ」「も」をつけ5文字に整える。同時に入力された語を解析し、システム内にある季語や慣用語、擬態語など6種類、計8万8600の用例を収めたデータベース

スから関連する言葉を探す。「樹水」「風花」「こんこん」など関連語を見つけたら、発展させて「樹水の空に」「風花つれて」「咳こんこん」と数例のフレーズを作る。前

後のつながりの良さなどを独自の「連想計算」で比較して選び、五七五の形を整えると完成だ。

活用は、その境地に近づいたための工夫の一つだという。土佐教授は、映像やパソコンを使って日本文化をテーマにした芸術作品などを作る「カルチュラル・コンピューティング」と呼ばれる分野の専門家だ。「携帯電話やメールの普及で、人間同士のつき合いが浅くなった。コミュニケーションを深めるのに役立つシステムを開発したい」と考え、大勢で楽しめて「座の文学」と呼ばれる俳句に目をつけた。

単語入れ

歌枕選び

五七五

俳句には「古池や／蛙飛びこむ水の音」など、「A／B」の異なる二つのフレーズのイメージを衝突させ、風流な味を生む作り方がある。このシステムも応用している

が、土佐教授は「一般論としてコンピューターが、単にAとBの言葉の組み合わせを無数に調べるだけで、『あわれ』や『切ない』感じは出ない」と話す。俳諧味を出すには、五七五の語句がどんなときに情緒を生むのか根源的な「法則」を見出し、コンピューター化する必要がある。歌枕の

翌年に初代の「ヒツチ俳句」を完成。現在の新型は、昨年から研究を続けている。「ヒツチ俳句には英訳機能がある。システムの助けを借りて俳句をやり取りすれば、海外の異なる文化圏の人間とも心の交流ができます」。大きな夢を語る。

一連のシステムは、7月11日まで京大総合博物館で展示する。11日午後2時から、土佐教授が参加しパネルディスカッション「日本文化×神道×コンピューター」を開く予定だ。

京大・土佐教授ら共同研究 携帯電話、ボタン操作



俳句創作支援システム「ヒツチ俳句」を使い、携帯電話で俳句を詠む土佐尚子教授(左)ら(京都大)＝菊野哲也撮影